

大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』の推進（10）

～幼児期における勇気づけの教育～

石垣市教育委員会 教育総務課 平得 航二郎



石垣市教育委員会では、昨年度から『勇気づけの教育』の推進に取り組んでいるところであり、今年度も引き続き『勇気づけの教育』を推進してまいります。

さて、私には4歳の息子と1歳の娘がおりますが、第10回は、家庭における幼児教育の観点からの勇気づけの教育について書いていきたいと思っております。

石垣市教育委員会が推進する勇気づけの『勇気』とは、子どもが自分で考え、判断し、行動できるように『あと一歩前に進む力』としています。発達心理学では、通常1歳半頃から自分の意思により何かをやり遂げたいといったチャレンジ精神が芽生え、3歳以上の幼児期には、目標を達成するために計画を立て、その達成を目指すといわれています。つまり、幼児期においても、子どもは自分で考え、判断し、行動しようとしているのです。

もちろん幼児期間の子どもはその経験の少なさから失敗も多く、また、善悪の判断といった道徳性も芽生えていないことから、親からするとそれが気がかりで、ときにはイタズラに見えてしまうこともあります。しかし、幼児期においても子どもは自分で考え、判断し、行動しようとしていることから、まわりが勇気づけをしてあげることで『あと一歩前に進む力』を養うことができます。

では、幼児に対してはどのように勇気づけをしてあげると良いのでしょうか。それは、これまで紹介した児童生徒への勇気づけとなんら変わりません。言うなれば、子どもも大人も変わりません。マズローの欲求5段階説でいう「人から認められたい」という承認の欲求を満たすことで、人は次のステップである「自分の能力を高めたい」という自己実現の欲求が生まれます。幼児期においても、子ども自身は言葉にはできませんが「親に認められたい」、「兄弟や家族に認められたい」、「先生に認められたい」といった欲求を持っています。その欲求を満たしてあげること、つまり、幼児の行動を認めてあげることが勇気づけの教育に繋がっていきます。

ところで、幼児の行動を認めるとはどのようなことでしょうか。簡単に言うと『褒める』ということなのですが、失敗ばかりの幼児の行動を皆さんはどのように褒めていますか。先程述べたように、幼児も目標を達成するために計画を立て、その達成を目指します。目指した結果失敗したりもします。幼児ゆえにうまく言葉にできませんが、その失敗の前には本人なりの計画があり、その失敗の前には本人の成功目標が必ずあるはずで、子どもが失敗しても「本当は何々したかったんだよね。その気持ちが嬉しいな。」「何々するためにここまでは出来たね。すごい！」といった子どもの行動そのものを認めてあげれば、子どもの次の意欲を高める勇気づけになります。これには、子どもの計画、成功目標をきちんと見つけてあげられるかが鍵となります。子どもの失敗に感情的になる前に、一度子どもの気持ちになって、子どもが何をどのようにしようとしたのかを考えるよう心がけることが大切だと思います。

先程、勇気づけの方法は子どもも大人も変わらないと書きましたが、大人だって自身が認められると素直に嬉しい気持ちになります。こう言うと高度経済成長期の日本を支えてくれた世代の方々に怒られるかもしれませんが、ゆとり世代の私からすると『褒められて伸びる』は、人間にとっての本質だと思います。子育てをしていると親も失敗続きで悩むことが多々あります。だからこそ、大人も子どもも家族やまわりの方の行動を承認し合いながら、され合いながら子育てを楽しんでいただきたいと思います。勇気づけの教育は大人も子どもも同じです。

まずは私達から！